

---

echo of sea

東雲咲夜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

echo of sea

### 【NZコード】

N8248G

### 【作者名】

東雲咲夜

### 【あらすじ】

わたしは、ふらふらと誘われるように海へと入る。いったい、わたしを呼んでいたのは誰だろう。そして、わたしはいつたい誰を呼ぶのだろうか。

まるで燃えているような、真っ赤な夕日。  
その夕日を反射して、赤く揺らめく深い海。  
わたしは、きっとそこで生まれたのだと思う。  
そして今、わたしはその海で死んでいく。

わたしの体は、ゆらゆらと漂いながら、海の底へと沈んでいく。  
海へと入つてから、どれくらいの時間が経つたのだらう。  
感覚は麻痺して、けれど意識は鮮明だった。  
視界に映る色は、深い蒼の色。

もう光すらも届かない深さにいるはずなのに……

わたしの頭の中には、あの赤い海が焼きついていた。  
体と同じよつて思考もゆらゆらとしていて、とつとめのこと  
を考えていた。

たとえば。

最初、海の方では、必死にもがいて、とても苦しか  
つたのに。

今はどうだらう。静かで、緩やかで、心地よさを感じてしまう  
ほど。

なんだ、底まで沈んでしまえば、樂じゃないか。

大きな泡を吐きながら暴れていた自分が、酷く滑稽に思えた。

一生も同じようなものなのかな。

ふつと、一瞬そんなことを考えた。  
それは泡みたいにはじけていった。

何度も何度も、同じようなことを考えて、いつたりきたりの思考  
が辿り着いたのは。

この海に入る前のことだった

その日、わたしはあの人と会う約束をしていた。

指定の場所で、待ち合わせをして。あの人�이来て、わたしはとても喜んでいた。

それなのに、あの人はわたしをタクシーに乗せた。行き先は、最寄の駅だった。

どうして。

わたしの頭の中は、そのことで埋め尽くされていた。

これから、買い物をしたり、食事をしたり、語り合ったり。

そういうことをするはずなのに、どうしてわたしを帰そうとするのだろうと。

だから、感情のままに、あの人にはわたしは尋ねたのを覚えている。どうしてなの？ と。

あの人は、小さな声でたつた一言だけ喋ってくれた。  
もう終わりにしよう。

その声は、小さいけれども、揺らがないであろう意思を持つていって。

何をいつても、わたし達は終わってしまうのだなと思った。

その後に、理由が知りたい、と思った。

あの人気が結婚しているのは知っていたけれど。

それが原因なのかどうかも、わからないままなんて。

もやもやしてとても嫌だった。

だから、あの人には死にすがりついたのだけれど、何も言ってくれなかつた。

それが悲しくて寂しくて、わたしはタクシーを止めて、下りた。家に帰りたくもなかつたから、適当なホテルを探して泊まった。その後、一人でひとしきり泣いた。涙が枯れてしまうかと思つほど。

泣くだけ泣いたら、何故かすつきりしていた。

あの人のこととはもう忘れよう。そう思つていたはずなのに。

知らない街を、一人で彷徨い歩いて。  
新しい洋服や、靴、化粧品。  
色々な物を買つては、妙に弾んだ気持ちでいた。

沈み始めた頃は、どうして自殺したのかわからなかつた。

ひとしきり買い物をして、何処へ行こうかと考えながら、わたしは歩いていた。

そうしたら、潮の香りがどこからが漂つてきて。  
自然と足は、その香りの方へと向かつていた。  
気が付いたら砂浜にいて、目の前には赤い海があつた。  
そしてわたしはサンダルのまま、ふらふらと誘われるよつに海へと入つた。

今なら、どうして海へ入つたのかわかるよつた気がする。  
誰かに、呼ばれていたのかもしれない。

わたしみたいに、海へと消えていった見知らぬ誰か。  
その人達の声が、木霊みたいに響くから、誘われてしまったの。  
変なことを考へてるな……と思つて、わたしはたぶん笑つた。  
声は出ないから、口の形を歪めてみただけだけだ。

少しだけ、沈む速度が速くなつたような気がした。  
周りの景色は変わらないから、確かめようがないのだけれど。  
ぼんやりと、終わりが近いのかなあ、と思つて。  
無意味だと知りながら、胸の内を吐き出してみた。

もつと生きたいとか、死にたくない、とかそういうことじゃなく  
て。

お店の美味しいケーキが食べたいな、とか、もつとオシャレした  
かつたな、とか。

もつと、色んな恋愛がしたかつたなとか。  
どれも、みんな同じようなことに思えた。

言葉にも音にもならない想いは、小さな泡になった。  
だんだんと意識が朦朧としてきて……

わたしは、わたしでなくなるんだな と思つた。  
怖くはない。悲しくもない。ただ、淋しかつた。

ゆらゆらと浮かんでいった泡は、やがて木靈になるのだろう。  
そうして、わたしもまた、淋しい誰かを誘つのだろう。  
木靈の海に抱かれながら、わたしは静かに溶けていった。

(後書き)

お読みください、ありがとうございました。

よく海つて、連れて行かれるとかいいますよね……？

そんな所から、イメージして出来ました。

でも実際、何事おいても、沈んでしまえば、ある意味では楽になりますよね。

あえてもがくのですから、人間とは不思議なものですね。

読み終えた後に、何か感じていただけたら、幸いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8248g/>

---

echo of sea

2010年12月30日14時19分発行